

2021年「大学入学共通テスト」【国語】現代文へ向けて

このたび、2021年の「大学入学共通テスト」の【国語】の出題方法等について、大学入試センターより告知がありました。

公表された文書のうち、「出題方法等」には、オールマーク式で、試験時間80分、200点満点、近代以降の文章および古典（古文、漢文）を出題とあり、大学入試センター試験を引き継ぐ形になっています。しかしながら、「問題作成方針」は、記述式問題に関わる部分を除いては、おおむねこれまでの文言通りで、大きな変更はありません。

つまり今回の発表は、2021年の「大学入学共通テスト」が、センター試験への単純な回帰ではなく、共通テストのねらいとして掲げられてきたさまざまな力を問う新しいタイプの試験となることを、改めて示したものだと考えられます。

具体的には、まず「論理的な文章、文学的な文章」に加えて「実用的な文章」をも題材とし、「大問ごとに一つの題材で問題を作成するだけでなく、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた、複数の題材による問題を含めて検討する」とあることが挙げられます。これまでに実施された共通テストの〈試行調査〉では、2017年に〈図表を含む文章〉が出題され、2018年には〈図表を含む文章〉〈法律の条文〉〈ポスター〉を組み合わせた形での出題がなされており、また文学的な文章においても、2017年に〈原典となる物語のあらすじ〉と〈それを踏まえた創作物語〉という形の小説、2018年に〈詩〉と〈その作者によるエッセイ〉というふうに、複数テキストを題材とする出題がなされました。これらはセンター試験とは大きく異なる点であり、新しい出題形式に即した学習が必要となるところだといえます。

また、「文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力を求める」とあるのも注目すべき点です。これは、もとは「……書いたりすることを求める」とあった箇所が「……書いたりする力を求める」と改められたものであり、記述式という形で直接〈書くこと〉はなくても、マーク式の問題を通じて〈書く力〉は試せる、というメッセージであると考えられます。実際、文章の構成や表現を問う設問はもちろん、読解設問においても、単に本文の内容との一致不一致を問うだけでなく、本文の言い換えや整理・要約として適切な表現になっているか否かを問う、といった形で〈表現力〉を問う設問は設定しうるのであり、オールマーク式となっても、学力の基盤として〈書く力〉を養うことの重要性は変わらないといえます。

さらにいえば、2021年の入試で新たなものとなるのは、共通テストだけとは限りません。共通テストへの記述式導入見送りの決定に際して、〈創造力・表現力を問う記述式は個別試験にこそふさわしい〉という声が少なからずあったことを鑑みれば、今後、各大学の個別試験で、従来より踏み込んだ形での記述式設問が出題されるようになっていくことが期待されます。既に大学

入試センターからは、個別試験のモデル問題として、複数の文章を組み合わせた題材を用い、それらの文章の内容について「あなたの考えを述べよ」と求める問題が公表されており、2019年の入試でもすでに、その種の問題を出題する大学は増え始めています。

いうまでもなく、共通テストをはじめとする新しい入試は、これまでの国語学習を否定するものではありません。一つのテキストを丹念に読み、その意味するところを的確に理解する力は、読解・思考の基盤として不可欠のものです。そうした力を土台としつつ、先に見たような新たな力を積み上げていくことが求められているのです。

共通テストの実施まで一年を切りました。既に共通テストのための学習を進めてきている皆さんは、学習の基本的な方向性は変わらないものと考えて、さらに努力を重ねて戴ければと思います。これから学習を始めようと考えている皆さんは、先に述べたような共通テストの特徴を理解し、今後の学習に生かして戴ければと思います。

駿台現代文科 共通テスト模試出題担当